

京都グローバリゼーション研究所通信

第4号 2009年9月

京都グローバリゼーション研究所

Kyoto Institute on Globalization (KIOG)

主宰 佐々木 建

〒603-8151 京都市北区小山下総町 37

TEL:075-451-8303 FAX:075-451-3682

E-Mail:kitanihito@aol.com

<http://www.focusglobal.org/>

<http://www.focusglobal.org/kitanihito/>



目 次

時代の課題

- 「100年に一度」というごまかし・・・・・・・・1
- 理念なき低炭素社会構想・・・・・・・・5
- 「教養」とは何か・・・・・・・・8

評 論

- 霧社からノッカマップへー先住民蜂起の意味を問うー・・・・・・・・11

書評・紹介

- サイード／バレンボイムに学ぶー「対話」と「学び合い」の時代へー・・・・24

随 想

- 果てからの声（続）・・・・・・・・28
- 金子牧場と金子のばあさん

短 信

- ・・・・・・・・42
- 老いと病に付き合って生きる・・男の見映え・・拙宅の宝・・研究所の活動

時代の課題

「100年に一度」というごまかし

「100年に一度」という表現がメディア上に踊る。この言葉が正確なのかどうかについて何の疑念も示さずにである。しかも経済や国際関係の専門家と称する人たちまでもが使うのだからやりきれない。

この表現がアメリカに発したものであることは間違いない。確かにこの國にとっては「100年に一度」の体験といってもよいかもしれない。この國は国内が戦場になることもなく戦後を迎え、世界経済の一人勝ちの覇者となった。これに対し、日本やヨーロッパは国土と生産能力は荒廃、疲弊した。私は少年時代に日本の戦後危機を体験したが、これを超える規模の深刻な経済危機をそれ以降体験したことはない。朝鮮戦争後の恐慌の時も大学生の就職状況は厳しかったし、エネルギー革命による炭鉱労働者の失業問題も深刻だった。これらの歴史的事実を踏まえれば、日本にとっては「100年に一度」とは決していけない。

しかし問題はそこにあるのではない。私どもは今、過去に例のない特徴と規模の新たな地球大的危機に直面している。「100年に一度」という表現が未体験という意味で使われているのならよしとしよう。私どもが体験している

のは、グローバル資本主義、社会主義の失敗に力を得て市場原理主義に依拠して地球規模に拡大した新しい資本主義の危機である。

この危機の引き金をひいたのは極限にまで成長した投機システムの瓦解であったことから、今回の危機は「マネー資本主義」の危機であって、産業循環とは関わりないことと主張される。しかし投機によるバブルが過剰な投資を呼び、過剰設備を作り出したことは明らかだし、新興国との競争の激化によって顕在化するはずの設備過剰は金融資産の見せかけの拡大によって隠蔽され自覚されることはなかった。その見せかけの拡大を豊かさとして錯覚したのである。だからよく観察すると、現在の危機の核心は投機の崩壊を引き金にした産業恐慌であることは明らかである。しかもかってない規模の過剰設備廃棄と失業増を生み出しながら進んでいる。廃棄が完了しない限り雇用情勢は上向かないし、国内市場の縮小は止まらない。

既存の産業構造を基礎に景気回復が目指されてよいものだろうか。中国との熾烈な競争関係、高齢化と人口減少という現実を直視するなら、早期の回復を実現するには産業構造やインフラの大胆な改造を政策的に誘導することが不可欠である。オバマ政権が危機対策としてグリーン・ニューディールとインフラの再編をうたいあげたことに学ぶべきであろう。

この危機は、独自の信用・金融恐慌を展開させている。この点にこそグローバル資本主義の危機の最大の特徴がある。この危機は金融工学等の新しい金融商品創造技術が作り出したものだ主張される。しかしよく考えてみよう。資本主義そのものが投機的な経済である。資本蓄積には一定

の貨幣の集積が必要だ。お金を動かせなければ企業も工場も作れない。そのために信用制度と証券市場が資本主義の発展と共に、あるいはその前提として誕生していたのである。株式会社の普及は、生産活動とは不可分に結びついていったとはいえ、この市場の独自性を高め、市場の規模を拡大していったのである。したがって恐慌はいつも取引所での暴落をともなった。

グローバル資本主義の投機性は本来の資本主義の投機性を共有しながらも、大きく違う点がある。第1に、世界中から過剰資金が集められ、投機が地球大的に制度化された。中国がため込んだ外貨準備も、アラブ産油国のオイルマネーもすべてつぎ込まれている。小国の家庭の主婦たちのへそくりさえもが投入されている。このような事態と体験は過去100年のあいだにはたして起きていただろうか。

第2に、投機はあらゆる部門を捉えている。有価証券市場だけでなく、金、石油、非鉄金属等の原材料市場、農産物先物市場、不動産市場も投機の舞台である。投機資金はその間をより高い利得を求めて自由に動き回る。第3に、投機は先進国だけでなく小国をも巻き込み、東ヨーロッパ旧社会主義国の危機を深刻なものにした。あらゆる分野、あらゆる国が世界的規模で投機に深く取り込まれた寄生的なシステムが登場し、その危機を今体験しているのだ。

このシステムの厄介なところは、投機の主体が既存の信用制度の投資銀行化を通じて一体化したことだ。そのため投機の破綻は信用全体の収縮をもたらし、恐慌を深刻なものにしている。過剰資本の監視と規制のあり方が問われているのだが、規制は本来の信用制度を収縮させ、資本蓄積を萎縮させかねない。過剰資金の投機的運用の監視と規制

を目論む G20 が統一して施策を実施し、成功する見通しは容易なものではないだろう。危機からの脱出が成功したかどうかは、個別の先進国の景気回復にとどまらず、地域統合の次元で、さらにはグローバルな回復で判断されなければならない。小国を犠牲にした回復、自国の回復のみを優先する施策は許されるものではない。

この危機によって、グローバル資本主義の矛盾の深刻さが日々露呈されている。その成立過程で最も重要なことは、中国が「社会主義」を標榜しながら特異な資本主義、帝国主義への道に踏み出し、その過程が速まったことだ。その発展は資本主義世界にさまざまな影響を及ぼしている。勢力範囲、資源独占、資金循環だけでなく、人権抑圧の傾向を広め、グローバルな低賃金への流れを速めている。この制度の下では小国は今まで以上に金融的術策に翻弄され、その生存権は侵害される。自らの内部の民族的権利を蹂躪する国が対等な共存を目指す世界的制度の実現を目指すはずがない。このこの奇怪な中国資本主義への依存が広まり、いまではその外貨準備と広大な市場にアメリカさえもがひれ伏している。このような中国の台頭が自然破壊と地球環境危機を促進していることも見落とせない。

このままいけば、投機的資本主義が再建されるだけでなく、自然破壊的体制、人権抑圧的体制、低賃金の体制が全世界で拡大再生産されることも目に見えている。この流れを、抗することなく放置してよいものだろうか。対抗する理念を模索する道のりはおそらく長く、ようやく始まったばかりである。

理念なき低炭素社会構想

低炭素社会、低炭素経済、低炭素技術革新と「低炭素」という言葉をマスメディアでお目にかからない日はない。あえて「社会」と銘打つ以上どのような将来ビジョンが示されているのか、私どもが本来目指している持続可能性や持続可能な社会とはどのように関連づけられるのか。そのあたりは明確ではなく、相も変わらぬ官製用語の水準にとどまっている。いろんな解釈があり得るが、世界トップレベルの省エネ技術を使いこなせる社会のこのようである。国民には今までの節約活動に加えて、省エネ機器の購入を増やすことを求め、それも含めて相応の経済負担を強いる、これがこの社会の核心のようである。この負担が正しく公正に算出されているかどうか検討されなければならない。

負担が必要だとしても、その前に「節約」が持つ可能性を十分に汲み尽くすことが重要だ。学校教育、社会教育のあらゆる次元で市民の環境意識をたかめ、その「節約」行動自体が日常化する状況を作り出すべきだ。エアコンも適温に抑え、照明もこまめに消す等、「節約」の試みが躊躇なくおこなえるようにならなければならない。デパ地下の買い物風景をを観察してみたらよい。自分の袋で買い物をしている人の比率は驚くほど低い。あれほどエコバックが流行したのにである。自分の買い物袋を使うと万引の疑いがかかるからと言う説さえもある。人相の悪い私でもでも、いつも複数の店の買い物を自分の袋に詰めこんでいるが、

疑われたことは一度もない。

浪費を放置しながら、リサイクルを説いてみても無意味ではないか。ものを可能な限り長く無駄なく使い、再利用するという生活態度が定着しなければならない。電力消費にと止まらず、あらゆる購入・消費行動にともなう隠されたエネルギー消費が点検され、削減されなければならない。例えば農産物消費についてみると、最近では地産地消の意義が強調されるが、ビニールハウス利用の意味も問い直されるべきだろう。紙のリサイクルにも多くの問題がある。オフィスにおける紙の消費も再考の余地がある。

要するに、省エネ機器が普及しても、「節約」という生活態度が定着しなければ、エネルギー消費が絶対的に減少するとはかぎらないということだ。そのことは誰にでも簡単にきる計算ではないか。しかも、機器あたりの省エネ効率を上回る時間で利用すれば相殺されてしまうのだから。

「節約」がどれほどのエネルギー消費を削減するのか正確に計算することが必要だ。

さらに言えば、大都市構造がエネルギー浪費を増大させている。容積率が2倍の高層ビルを建設すれば、エアコン利用による電力消費も倍になる。エレベーターの電力消費も増える。最近の大都市に見られるゲリラ豪雨と都市洪水の原因ははっきりしている。温暖化による気候変動の影響もあるが、大都市圏のヒートアイランド現象による異常な降雨に治水が追いつかない状況が作り出されている。。緑地の減少、高層化、自動車の集中が進み、都市の構造が気候変動に適合しなくなっているからだ。

解決策は明らかである。都市政策を地球環境保全の視点から全面的に見直すことだ。建造物と自動車の集積を抑制

すること、都市の公園化が緊急に求められている。空き地があればコンクリートで固めて高層ビルを建てるという都市づくりはそろそろ考え直そう。真夏に全館冷房で講義するような教育のシステムもあらためよう。重要なことは産業構造、物流、交通体系、社会や個人の生活の仕組みの見直し、都市圏への経営資源の集積と人口集中の抑制、都市計画と建築基準法のエコロジー的見直し、それらを政策的に誘導していくことだ。

多くの日本人が海外旅行に出かけ、ヨーロッパの都市をめぐる。パリ、ロンドン、ベルリン等どこに行っても、都市の田園化、公共交通の充実、パーク・アンド・ライド、都心の「歩行者天国」、自転車道の整備等々を観察すると、日本の大都市圏の整備の貧弱さを痛感させられる。都市のエコロジー的改造のためには、せめてヨーロッパ諸国の達成点に可能な限り早く到達することが必要だ。そこから都市のエコロジー的改造が本格的に始まる。

そもそも温室効果ガスの削減は地球的課題として国際的協同行動として実施されなければ意味がない。先進国市場で省エネ機器が少しばかり普及し、低燃費の自動車を走らせたとしても、燃費の悪い車が地球全体に増加したのでは意味がない。重要なことは、先進国が相応の削減目標を提示するだけでなく、自らが作り出した石油依存・資源浪費型の産業・生活構造の改革のモデルを提示することだ。その提示がない限り、先進国責任を果たしていることにはならない。

いまのような水準の議論では「低炭素社会」が即地球規模での人類全体に及ぶ持続可能な社会にはつながらない。気候変動がもたらしつつある人類の生存条件の激動に思い

をはせる将来ビジョンを欠く「温暖化対策」論議は不毛というほかない。

「教養」とは何か

「教養」という言葉に悩まされ続けてきた。地方出の私は「教養」がないと、あるいは学究たるために必要な「素養」を欠いていると実感させられることはたびたびだった。それらの言葉の意味を考えているうちに、肝心の「教養」

「素養」という言葉が消えてしまった。それに代わって流行しはじめたのが「知」であるとか「・・・力」なる表現だ。

「知」はそれを独占する一部の人びとの特権意識を感じさせて、書物のタイトルにこの字を発見すると手に取るのを躊躇させられる。「・・・力」ともなると、食わず嫌いと言われようと、もう覗いて見る気もしなくなる。

社会に内在的な連帯の仕組みが解体され、ばらばらにされた個人の力能の差異に注目されるようになったのである。しかもその力能は資格や検定で測定されるかのような状況さえ生み出している。大学はダブルスクールと化し、学生たちは本来の大学教育に期待するよりも可能な限り多くの資格を取得するために狂奔する。その結果、この分野の業者たちの格好の餌食となりはてる。先日世間を騒がせた漢検で膨大な不正利益を得ていた京都の親子などその好例であろう。

見過ごせないのはこの傾向に合わせて、脳科学者と称する評論家が跋扈しはじめていることだ。個人の力能の差異を脳の構造に還元する風潮すら生みだし始めている。

これらの動きは、国家権力によって積極的に利用され始めている。いわゆる「格差」問題である。個人的力能があると認定されものは拾い上げられ、残りはドロップアウトさせられる。非正規雇用に呻吟する若者たちはおまえたちの力のなさのためだ、自己責任だと宣告される。

「教養」はかつては選ばれたものたちの特権であった。しかもそれは支配階級のために選ばれたものたちの特権であり、その集団や階層が持つべき知的獲得物の集積であり、生活態度でもあった。大学の歴史や思想史から明らかになるように、そこからは「左翼的」なもの、「急進的」なものは排除された。私の学生時代には左翼であるということだけで、大学のギルド的養成システムから排除されるおそれがあった。大学教師への夢を諦めざるを得なかった K・マルクスの例を想起するまでもなく、このことは戦後アメリカのマッカーシズム、戦後日本のレッド・パージが大学史、思想史に隠れもなく記録されている。

社会全体の「知的」「教養的」水準はおろか、勝利した筈の資本主義のリーダーたち、またその幹部候補生たちの資質低下は目に余る。ろくに演説もできず、演説原稿も書けない政治家たち、あとを絶たない汚職、官僚たちの無能ぶりをみるにつけ、「教養」を標榜した教育を破壊し、大学を専門性重視の高等教育機関に作り替えた教育政策の惨憺たる状況に心を痛めているのは私だけではあるまい。自分で自分の基盤を破壊したのだから、その責めを負わねばならないのも破壊した彼ら自身である。そういうこともあ

ってか、最近明確な表現ではなくとも、「教養」の再建を主張する論調を見かけることが多くなった。

今年2月2日に経済同友会は「18歳までに社会人としての基礎を学ぶー大切な将来世代の育成に向けて 中等教育、大学への期待と企業がなすべきことー」を発表した。これを読むと笑いを禁じ得ない。大学における教養課程を打ち壊して専門教育中心に作り替えた連中が教養の再興を目指すというのだから。

かつて支配的だった特権的「教養」観は今ではもう通用しない。保守的支配層が固執する排他的愛国主義も、どれほど声高に主張しても今の時代に通用する筈がない。今は特権的な、対立的な教養とは区別された普遍的教養と生活態度が求められる時代なのだ。

求められている「教養」と生活態度はどのようなものか。第1に、地球環境問題、世界平和、人口爆発と貧困等の地球的問題群を理解するために努力し、それを日常的に実践する態度である。第2に、地球上のあらゆる文化を理解しようとし、それと対話する態度である。第3に、国民である以上に、地球民として思考し行動する態度である。この三つの原則が大学教育だけでなく、「基礎学力」の理念として保持されるべきであろう。



評論

霧社からノッカマップへ —先住民蜂起の意味を問う—



一昨年台湾を旅した際に道路標識に「霧社」（むしゃ）という地名を発見して、私は日本の植民地統治についての無知を思い知らされてうろたえた。1930年に発生した台湾先住民の対日蜂起、いわゆる「霧社事件」の「霧社」とは先住民の結社の名称とばかり思いこんでいたからだ。友人たちが景勝地、日月潭に宿を取ってくれていたのも、残念ながら道を反対にとり、私の「霧社」訪問と無知の解消の機会は次回の旅に持ち越された。

昨年6月末、霧社を訪ねる機会がようやく与えられた。社会科学者のはしくれとして、無知は早急に埋め合わせなければならないと思った。台湾の友人たちは私の台湾先住民への関心を度の過ぎたものとして奇異に感じていただろうが、埋め合わせるのに私は焦っていた。山岳地帯に入るのには自動車を使わなくてはならないので、移動はかなりの強行軍だったが、なんとか日程に入れてくれた。地図でみると、東海岸から入る方が近いのだが、先日の大震災で

損傷した道路は不通のままだという。結局台中から車をチャーターして入ることにした。

なぜ先住民問題なのか。近代的帝国主義の支配のもとで苛烈な先住民絶滅政策と同化政策が展開され、近現代世界史は先住民絶滅を目指す血なまぐさい事件で彩られている。南北アメリカ大陸へのヨーロッパ人の入植過程で繰り広げられた先住民殺戮、オーストリア、ニュージーランドにおける先住民虐殺と苛酷な同化政策、奴隷貿易、コンゴにおける先住民の奴隷的使役、南アフリカにおけるアパルトヘイト等々、その実例はいくらでもあげることができる。

ヨーロッパ帝国主義、そしてアメリカ帝国主義は徹底した白人優越性と選民意識を背景に展開され、その過程で形成された人種主義のイデオロギーはいまなお強固に維持されている。植民地支配に対してまだ謝罪も補償もだされていない。奴隷制は廃止され、先住民の権利が保障されるようになったとはいえ、現代でも疑似奴隷制は繰り返し登場し、先住民差別は消え去ることなく維持されている。

これらの歴史的傾向を日本の植民地支配も共有している。帝国主義と血なまぐさい植民地支配はアメリカ、ヨーロッパだけのものとするのは明らかに誤りだ。北海道、沖縄、朝鮮半島、台湾の支配のなかで展開された過酷な同化政策と少数先住民の殺戮は、先進帝国主義国に劣らぬものであった。アメリカやヨーロッパの先進列強と同等に日本も植民地経営をやってみせることができる、そのことを示すことが後発帝国主義が帝国主義の仲間として認めもらえる基準であった。「霧社事件」はその過程で引き起こされた事件であり、日本帝国主義の陰惨な統治の本質を暴き出してくれる。



台中を早朝に発ち、山中を走り、日本人襲撃と虐殺の舞台となった霧社の集落に到着、翌日に立ち寄る予定なので走り抜けた。そこからは下りとなり、七曲がりの道を走ってその日の宿泊地、廬山温泉に着いたのは正午過ぎだった。大型車をチャーターしたのは正解だった。車酔いに苦しまずにすんだ。それでもくたびれはて、ホテルのベットに倒れこんだ。



このあたりは蜂起の指導者モーナ・ルダオが率いたマヘボ社があったあたりという。この温泉がいつ頃開発されたものかわからないが、おそらく蜂起の弾圧のあとであろう。深い谷と急流、そして森、当時の風景を想像できる。今は川にそって十数件のホテルからなる温泉街が形成されている。私の泊まったホテルの対岸あたりがモーナ・ルダオの抵抗闘争と最後の場所という。泊まったホテルのオーナーは日本語を理解できず土地の詳しい案内を聞けなかったが、ホテルのパンフレットには蜂起の遺跡の案内図が示されていた。



第4代総督児玉源太郎は、漢族の抵抗を排除した後、先住民族に対する方針、「対蕃方針」の基本を次のように述べている。近藤正己氏の研究成果から引用させて頂く。

「蕃界ニ棲息スル蛮人ハ頑蠢馭シ難ク野生禽獸ニ齊シ。若シ夫レ之ニ酒食ヲ饗シテ慰撫ヲ加エ乃チ依リテ誘導ヲ就サントスル如キ、長年月ノ間ニハ或ル程度マデ進化シ得ラルベキモ、刻下新領土経営ノ急要ハ決シテ斯カル緩慢ナル姑息手段ヲ准サズ。宜シク速カニ銳意ニシテ前途ノ障礙ヲ絶滅セシムルコトヲ期スヘキナリ。」

絶滅策の宣言である。なんと鮮烈で明確な先住民観であろうか。「禽獸」に等しいというのである(注)。

しかし、絶滅させるには膨大な軍事費と人的損害を覚悟せねばならず、その上先住民族の居住地域の木材、樟脳等の資源への渴望はこの政策の実施を躊躇させた。彼らを低賃金の労働力として使役する方が得策であった。「威シテ而ル後撫スル」理蕃政策に転換したのである。しかし、「禽獸」に等しいとした児玉の「蕃人」観は変更されたのであろうか。そうではあるまい。その底流には児玉の先住民認識は脈々と流れていたと言えきだろう。

そもそも「蕃」とはどのような意味か。中国語では古来、西の民族を「夷」と、南の民族を「蕃」と呼び習わしていたようである。『日本国語大辞典』によると、「蕃」とは、(1)中華からみて南方のえびす、南方の未開民族、南蛮、化外の民、(2)外国、または外国人、とされる。ほぼ中

国的理解が示されている。未知の地域の人々であって、この表現には明確な差別意識は感じられない。

「蕃人」となると、漢字の日本的応用の世界が広がる。

『日本国語大辞典』によると、「蕃人」とは、(1) えびすの人、未開の土地の人、(2) 外国人、(3) 台湾の原住民である山地人の呼称、日本統治時代は高砂族ともいった、となる。この理解は、上で見た児玉の見解と比べたらなんと無内容な定義であろう。この解釈には「禽獣」にも等しいとした彼の差別的な理解はみじんも感じ取れない。国語学者がつくる辞書とはこの程度の水準なのか。

台湾での先住民抑圧の体験は、日本の文化的状況に大きな影響を与えた。私が子どもの頃に流行った『冒険ダン吉』という漫画がある。島田啓三が1933年から『少年倶楽部』に連載したものがある。ダン吉という少年が南の海で難破、島に漂着し、そこに住む先住民を家来のカリ公というネズミと一緒に、持ち前のユーモアと頓智で王として支配する話だ。戦争を題材にしていないことと、ユーモアあふれた運びから人気を博した。南太平洋に住むのはポリネシア系の人たちでアフリカ系の黒人ではない。それはおくとしても、彼らの本来の名前を無視して、命令がしやすいように「蕃公1」「蕃公2」と呼び名を勝手につけるのである。「野生禽獣ニ齊シ」とする認識こそ含まれてはいないが、未開の「蕃」の支配者たらんとするイデオロギーに満ちたプロパガンダではあった。私の意識の深層にはこの認識がすり込まれている。であるからこそ、この意識を消し去ることにこだわるのだ。

(注) 陸軍大将児玉源太郎(1852-1906)は日露戦争を勝利に導いた「英雄」である。彼はこの差別的感覚を一体どこで学んだのだろうか。調べてみたい。児玉の先住民観をみるにつけ、明治期ナショナリズムや日露戦争を肯定的に理解しようとする考え方

には同調しかねる。司馬遼太郎の『坂の上の雲』で示された明治評価に不快感を覚えるのも同じ理由からだ。



この蜂起に対する抑圧策の特異さは、第1に、すでにみたような「野生禽獣ニ齊シ」とする先住民認識をもとにして熾烈な武力攻撃を加えた点にある。第2に、先住民同志を戦わせる施策をとったことだ。反抗蕃と味方蕃に分け、先住民同志を争わせて反乱を鎮圧する、しかも処刑、馘首という残酷な形で抑圧させたのである。

台湾先住民が本当に首狩りの風習を持っていたかどうかについて、私は論評するほどの知識はない。台湾の研究者たちもその風習があったことを認めていることからみて、おそらくあったのだろう。台湾人の研究者、傳氏は、先住民の数ある慣習の中で日本人が一番嫌ったのは「首狩り」だったとしている。私の手許に一冊の写真集がある。1935年10月の日付で、台湾総督府警務局理蕃課内、理蕃の友同人の手になる『台湾蕃界展望』である。そこにはタイヤル族について次のような記述がある。「彼らが祖先の遺訓とする首狩の陋習を墨守し、他種族の侵入を拒みつつ我領台に至った為、佐久間総督五カ年計画討伐事業も、其の大部分は実に本族に対して行われたのである。」

しかし傳氏のを含めこの指摘は納得できるものではない。反抗蕃の首に懸賞金をかけ首狩りをそそのかしたのは総督府側ではなかったのか。敵対するものの首を狩る、あ

るいは犯罪人を斬首するというのは日本の支配層の風習ではなかったのか。今日でも相手方に対する敵対的闘争心をあおるために「首をとってこい」と命じることは普通に行われているのではないか。先住民の中に残っていた風習を思い起こさせ、利用したのではないのか。

☆☆☆☆

現在の霧社には二つの象徴的な記念碑がある。一つは日本統治の痕跡である。集落を見下ろす小高い丘の上にかつての日本の統治の明確な痕跡が残っている。神社の跡だ。丘を登る石段の入口に赤く塗られた石の門がある。これは



鳥居を一部を破壊して転用したものであることはすぐにわかる。石段を登ると中国寺院がある。その前に2基の石灯籠があることからみてかつてここに神社があったことは確かだ。仮小屋のような寺院の背後に新しい華麗な寺院が建築中であった。新しい寺院の正面は旧寺院の方角と違っていた。新寺院の完成とともにこのモニュメントは撤去されるのだろうか。それとも日本の支配の現実を風化させないために保存されるのだろうか。

もう一つは、霧社の集落に入る入口にある蜂起の指導者モーナ・ルダオの壮大な墓所である。モーナ・ルダオは追

い詰められて家族を殺し自殺した。埋葬場所は秘匿されたが、密告によって暴かれ、彼の遺骸は台北帝国大学医学部の解剖学標本にされたという。日本の敗戦後に遺骨は取り戻され、ここに壮大な墓所が営まれたのであろう。その前に抗日蜂起の記念碑とモーナ・ルダオ



の立像がある。中川浩一氏らの著書にある墓所の写真にはこれらの立像や記念碑は写っていないから、この記念碑は民進党政権の下での政策転換によるものに違いない。

霧社事件とは日本人が虐殺された「事件」ではなく、支配に抗した「蜂起」であった。記念碑の前に立ち、私はその思いを強めた。



霧社を体験しながら、とりわけモーナ・ルダオの墓所の記念碑を前にして、私の郷里で起きた歴史的事件の結末に思いをはせてた。1789年（寛政元年）に起きたアイヌ最後の武力闘争となったクナシリ・メナシの反乱と血なまぐさい鎮圧の結末である。

場所請負商人飛騨屋の苛烈な搾取、絶滅をめざしている

ともとられかれない非人間的対応に対して 1789 年 5 月にクナシリ・メナシのアイヌが蜂起し、飛騨屋の雇われ和人を中心に 71 人を殺した事件に始まった。松前藩は直ちに鎮圧部隊を派遣し、関係したアイヌをノッカマップに集め、殺害に直接関わったアイヌ 37 人の首をはねさせた。裁判と処刑はこの地域の首長たちの手で行われた。狩られた首は塩漬けにされて松前に送られ、城下に晒されたという。

アイヌの抵抗運動はシャクシャインの反乱で終わったとする歴史書が多く、この事件は注目されてこなかった。近年、蠣崎波響（かきざきはきょう）の画業の再評価の動きと共に注目され始めているように思われる。1989 年に出版された中村真一郎の名著『蠣崎波響の生涯』もこの動きに大きな影響を与えた。

クナシリ・メナシの反乱の翌年、1790 年に描かれた彼の代表作「夷酋列像」（いしゅうれつぞう）12 枚は、この



反乱を収拾した、というよりも収拾を強制された味方アイヌの首長たちの肖像であった。彼のこの絵の一枚をコピーしておこう。クナシリ総首長ツキノエの肖像画である。この絵の人物を見ると、この絵だけでなく「夷酋列像」に写し取られたすべての人物像を観察すると、すぐにその異様さに気づく。身にまとった装束はあまりに壮麗華美である。アイヌの総首長といえども、手に入れるこ

とが難しい高価な蝦夷錦の衣を身にまとい黄金づくりの大刀を佩くことはなかったに違いない。それほどまでに着飾

って同胞に君臨することはなかったはずだ。おそらくは鎮圧の功によって藩主から拝領したものか、それとも画家による演出だったに違いない。私はその両方だった想像する。

波響のこの絵は明確な政治的意図を持って描かれたものだ。一つは味方して身内を処刑したことに対する論功行賞であり、もう一つは松前藩の蝦夷支配が、これほどまでに華美に装った首長を頂く民族をも包摂していることを誇示しようという意図を持っていたのではないか。実際のアイヌは非人間的な搾取と抑圧によって絶望的な貧窮状況にあった現実とは乖離していた。波響は蝦夷地（現在の北海道）を支配していた松前藩主の子として生まれ、のちに家老となった人物である。彼の実体からすれば、この絵の政治的性格は明瞭だ。



この絵を見て異様に感じるのは、首長たちの目に力がないことだ。同胞や縁者を処刑ざるを得なかった悲痛を考えるなら、また血なまぐさい処刑を求めた支配者の前でポーズをとること、というよりもとらされることに躊躇した

のであろうか。この絵は絶対的服従を勝ち取った抑圧者、弾圧者の側の記念碑でないのか。

ノッカマップには抑圧されたものたち、処刑されたものたちのための記念碑はなにもない。チャン跡とされる岬、小さな入り江と川、この河口にアイヌたちの集落があったのだろう。天気がよければ対岸にクナシリがみえる。おそらくこの川には川面がふくらむほどの鮭の遡上があったに

違いはない。彼らの遺骸はノッカマップの岬のどこかにまとめて埋葬されたが、その場所は今ではわからない。今訪ねると昆布採りと鮭定置網で生計を立てる小さな漁村があるだけだ。殺された和人の慰霊碑は網にかかって海中より拾い出され、今は納沙布岬に祀られている。この地に運んで陸揚げするときにあやまって海に落としたのであろう。あるいは建立されたものを誰かが故意に海中に投じたのかもしれない。後者は私の推理でしかない。しかし、このほうが劇的ではないだろうか。



霧社とノッカマップが私につきつける課題は何か。時代が違って、突きつけられているものは同じだと思う。

なによりもまず、先住民の抵抗の歴史をどのように位置づけるのかという問題だ。アイヌの歴史的体験が地方史のテーマにすぎず、日本人の移住や開拓の歴史のエピソード程度にしか捉えない歴史認識は終わりにしなければならない。アイヌや琉球の民の体験を日本史の重要な軸に据えることが求められている。

そのためには、日本人単一民族論の虚構とその背後に潜む「日本人」優越性の意識を打破しなければならない。先住民に対する抑圧と同化、殺戮と絶滅化政策の歴史を無視した「日本人」論は捨て去られなければならない。

2008年6月6日、国会は全会一致で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を採択した。この決議採

択には驚かされた。単一民族論を公然と主張してはばからない政治家たち、自覚するか否かにかかわらず単一民族史観を展開する歴史学者たちが横行するのに、この決議採択は欺瞞そのものではないのか。その前年、2008 年 9 月 13 日国連総会で採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」に賛成投票したことにより発生した採択劇であった。もちろん採択それ自体は大きな前進ではあるが、意識変革がない限り茶番でしかない。

1980 年代末に私は南アフリカに調査に入っていた。アパルトヘイト体制のもとでの差別と抑圧の実態を目の当たりにして、日本の現実に対す無知を知らされ、北海道に生まれ育った研究者として恥じた。

今でも私は自分の無知を恥じている。台湾先住民に対する同化政策は熾烈を極めた。蜂起の弾圧のあとに彼らを待っていた運命は苛酷な者だった。強制移住、日本の生活様式と日本名の強制、天皇に対する絶対的服従、そして最後には兵士として戦場にかり出された。その身体的機能に目をつけて南方戦線に送り込まれたという。この歴史を知らなかったということで、社会科学者の責任がは免罪されるものではない。知らないのなら、学んでその空白を埋めなければならぬ。霧社への旅は私に社会科学者としての自覚をうながす旅となった。

【参照文献・資料】

このテーマについて、私の手許にある文献・資料を参考までにあげておく。

●霧社蜂起（霧社事件）について

中川浩一・和歌森民男編著『霧社事件—台湾高砂族の蜂起—』三省堂、1980 年 5

月

「台湾先住民－日本信じ、最前線へ出征－」（写真が語る戦争）、『朝日新聞』 2007年4月14日

春山明哲『近代日本と台湾－霧社事件・殖民地統治政策の研究－』藤原書店、2008年6月

傳琪貽「台湾原住民族における植民地化と脱植民地化」『岩波講座・アジア・太平洋戦争』第2巻（「帝国の戦争体験」）岩波書店、2006年2月、所収

近藤正己「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」『岩波講座・近代日本と植民地』第2巻（「帝国統治の構造」）岩波書店、1992年12月、所収

周婉窈著、濱島敦俊監訳、石川豪・中西美貴訳『図説・台湾の歴史』平凡社、2007年2月
津島祐子『あまりに野蛮な』（上下2冊）講談社、2008年11月

●クナシリ・メナシの反乱、ノッカマップについて

『蠣崎波響とその時代』、展覧会図録、1991年

中村真一郎『蠣崎波響の生涯』新潮社、1989年10月

根室歴史研究会『クナシリ・メナシの戦い』郷土の歴史シリーズ 1、2005年2月

花崎皋平『静かな大地－松浦武四郎とアイヌ民族－』岩波書店、1988年9月

舟戸与一『蝦夷地別件』新潮社、1995年5月



書評・紹介

サード／バレンボイムに学ぶ ー「対話」と「学び合い」の時代へー

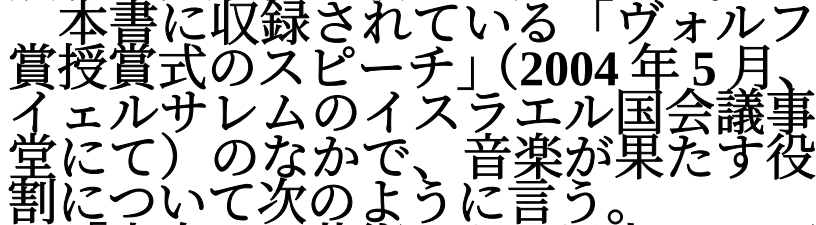
1

演アイ教徒の様はえする
任が、宗教た多て消現ある
就そ、無一し、のきはをで
はこ、教てウ、視そ、で、界姿の
マ、産ト、し、ド、重、は、服、境、が、た
バ、遺、ス、ソ、ン、を、で、克、の、し、
オ、の、キ、徒、ヒ、性、を、内、を、間、性、
ク、は、一、教、た、多、様、国、を、種、間、演、
バ、ラ、ク、は、ア、ヒ、と、文、化、の、リ、と、の、通、
大、統、領、ア、メ、リ、カ、を、と、ア、メ、リ、カ、の、通、
代、大、統、領、ア、ヒ、と、文、化、の、リ、と、の、通、
44、代、大、統、領、ア、ヒ、と、文、化、の、リ、と、の、通、
第、多、様、性、と、教、徒、あ、て、で、性、い、去、こ、
国、の、あ、る、や、で、め、
衆、の、ユ、ダ、を、含、
合、信、み、で、ユ、ダ、を、含、
リ、カ、の、強、み、で、ユ、ダ、を、含、
ア、メ、リ、カ、の、強、み、で、ユ、ダ、を、含、
説、の、メ、ス、者、か、ら、無、宗、教、者、を、含、



る演後多とこ掲の表い
べ任の「たどを彼のて
く、就、そのしり性。等
にユ、が、推、進、越、た、軍、さ、
ユ、シ、い、れ、を、彼、の、優、っ、字、示、
シ、ッ、な、か、策、を、教、で、あ、十、に、
ブ、ッ、も、と、み、て、政、い、ス、ト、観、軸、明、
G、だ、こ、ら、み、て、政、い、ス、ト、観、軸、明、
の、前、ん、だ、か、認、識、ら、キ、の、倫、の、こ、と、は、公、正、
者、の、読、言、を、考、人、音、出、る、の、態、度、は、公、正、
前、格、な、の、性、に、底、白、福、ら、は、そ、の、態、度、は、公、正、
と、説、の、様、は、ろ、げ、口、現、に、
た。それに比べるならオバマの主張する対話の公正さを占う政策であ
パレスチナ問題は彼の主張する対話の公正さを占う政策であ
で最大の試金石である。アメリカの路線の要求にそった路線であ
明らかな人種、特定の信仰の人びとの要求にそった路線であ
た。最近のガザに対する過剰な虐殺的攻撃、イスラエル総選

(3)、義、い。とすべな類的。翻
（意にい試感で正つ説きされい。
情と決て的に題のいにでさいた
友緯解れ治さ問人とかが紹介し
の経的ら政高のなるはと紹表
との本語なのチくもこをを
ド立根が大性平」スくりる物意
一設の「壮徳和レでよ迫書敬
ィの題夢の道「パ義書にのに
サラ問「家と。主蒙実こ社
はトナの術性いけ理啓真く版
でスチれ芸理な付原的、や出
書ケスかな倫は片を治りはと
本一レの大の他を動政あち者
オパて偉そるて運のでい訳



なんという確信に満ちた表明であろう。愚劣な政治性に対し自らの芸術の政治性の優位を宣言し、現実政治をさら

なる高みに引き上げようとする政治宣言でもある。このス
ピ文部は上述のDVDにも収録されている。イスラエルの政
府意義はさらに高まる。本書はその意味ですぐれて政治的
な物になっていく。

かってK・マルクスは「ヘーゲル法哲学批判序説」の
なかで「理論もまた、それが大衆をつかむやいなや、物質
的な力となる」と論じた(3)。バレンボイムはたつた一度
の演奏会でも大きな政治的力となることを示してくれら
る現代の学問は、そのように大衆を捉えて政治的力となり
うるのだろうか。学問も芸術も愚劣な政治の僕(しもべ)に成
り下がってはいけないのだ。

3

「対話」がこれからの国際政治において最も重要なキー
ワードになる。これは間違った方向が文化や学問の優種
越性を潜めた「対話」学び合いを、強し提唱するの、おの
にすぎない。私認め合い、共通の原理を作り上げる態度の意義を強
調したいからである。オバマにしたがえば「共通の人間性」
(common humanity)が実現されることだ。そのための
努力をいち早く開始したパレスチナ人E・サイードとユ
ダヤ人でありイスラエル人であるD・バレンボイムに学ば
なければならない。

【注】

- (1) 演説の日本語訳は次を参照した。『朝日新聞』2009年1月24日付。
- (2) Knowledge Is The Begining/The Ramallah Concert, 2DVD, 2006. 日本語版も入手できる。
- (3) E・サイードとの友情の結晶である対話集は、パレスチナ問題を理解する上でも必読書である。A・クゼミリアン編、中野真紀子訳『バレンボイム／サイード・音楽と社会』みすず書房、2004年7月。
- (4) カール・マルクス著、城塚登訳『ユダヤ人問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説』1974年3月、岩波書店、85ページ。

随 想

果てからの声（続）

金子牧場と金子のばあさん



JR 根室駅を降りて 200 メートルほど海側に進むと東西に延びる広い道路に出る。このまちに初めて降り立った人は誰でも駅のみすばらしさとこのだだっ広い道、賑わいのない駅前に寂寥たる雰囲気を感じるに違いない。この道は幕末から繁栄を誇った歴史上著名なまちに昔からあった道ではない。このまちは海運によって各地と結ばれていたから、このまちは海沿いに発展した。1921 年に釧路からこのまちまでの鉄道路線が開通し、駅が高台に建設されたことでこのまちの様相は変わった。海沿いの市街地と駅のある高台の段差が幾本かの傾斜の急な坂道で結ばれ、それを束ねるかのようにこの広い道が作られた。この道の両側には主に役所の建物が配置された。この配置によって役所はたびたび発生した大火による罹災を免れることもできた。

北海道根室支庁、営林署、裁判所、測候所、警察署、町役場と公会堂。私の通った高等学校もこの通りの近くにあった。逡巡次官として大礼服を身にまとった小池仁郎の銅像もあった。もっともこの銅像は砲弾に「リサイクル」さ

れるために献納という名目で撤去され、私がこの辺りを歩いた戦後には台座しか残っていなかった。私の母は小池の血縁で新潟から彼を頼って身一つでこのまちにやってきて、小池の家の養女となり、縁あって父と結婚した。小池は私の周囲では最も成功した移住者であった。このまちにも功績のあった人と聞いていた。母は小池が後見人であったことを自慢げに話してくれていたが、戦後の極貧状態からの脱出して大学に進学したいと切に願っていた私には、私の生まれた年に亡くなった成功者の存在などなんの慰めにも足しにもならなかった。

あれやこれやで私はこの通りの雰囲気が好きにはなれなかった。急な坂道を息を切らして登らなければなかった。もっともその頃の私の体重は55キロで痩身ではあったが。高校への通学のために雨の日も雪の日も風の日も学校正門にいたる急な坂道を登った。舗装されていないこの坂道は豪雨の時や雪解けの時には川のように水が流れ、冬はいつも表面が凍って滑った。いつもうつむいて登っていた。

それに加え得て、空襲の被害をまぬがれたこの地域には、札幌からやってきて数年すると転勤していく役人たちが住んだ。このまちの人びとの一部には中央の役人にこびを売るかのような雰囲気があったように思う。その雰囲気にはなじめなかった。このまちには、戦争が生み出した絶望的なまでの貧困の中で暮らし、脱出したくてもできずにもがく私には違和感があった。その感情は70歳を超えたいまでも残っている。

それなのにこの数年はあのまちを訪れるときはいつもこの通りの宿に泊まる。この閑散とした大通りの西の端にあるホテルである。このまちでホテルといえる宿は少ない。

駅の近くで、空港行きのシャトルバスも止まる。しかし、ここに泊まる最大の理由はあの 1945 年 7 月 15 日大空襲の日の体験を再確認する最終の作業に取りかかってみたいという気持ちにもかられるからだ。私の記憶深部にすり込まれている筈の風景を活力あるうちに呼び覚まして書き留めたいからだ。この記憶に触れることはつらいことで、ある意味では私にとってタブーであったともいえる。

ホテルのある場所はある日には憲兵隊が駐屯していた建物があった。真向かいに北斗小学校がある。この小学校は私の母校の花咲小学校より設立が遅いのに、公的な序列はいつも上であった。理由ははっきりしている。1936 年、私の生まれた年に、昭和天皇が陸軍大演習のついでにやってきてこの学校のグラウンドで拝謁の式典をやったからだ。この「行幸」については親たちの世代から話を聞かされた。土砂降りに近い雨の日に土下座して迎え、頭を上げたらもう通り過ぎていたいたという。軍服にマントを羽織って出迎えの人びとの前を通りすぎるこの日の天皇の写真が残っている。時代劇で大名の駕籠を土下座して迎える領民たちのシーンを思い出させる。「行幸」を記念する石碑はいまもグラウンドの片隅に残っている。

この学校の位置はあの頃と変わって、グラウンドと校舎の位置が逆になっている。このあたりを歩くといつもあの空襲の体験、この校舎の隅での仮住まい、2 年以上にわたるこの校舎での二部授業のことを思い出す。私の通っていた花咲国民学校は空襲で全焼したので、この校舎で学んだ。あの頃の木造校舎はもうない。私がこのまちを離れてから鉄筋で建て替えられてしまった。



あの日、空襲は早朝に始まった。前日の空襲で翌日も空襲があることは誰もが予想していた。夕食を明るいうちに慌ただしくすませ、その夜は停電だったから早いうちに寝た。枕元に防空頭巾その他を整え、服を着たまま寝たと思う。国民服にゲートルを巻いて寝たはずだ。



当時の服装の一部が私の手許にある。戦闘帽だ。この帽子を見るたびに、国民学校で体験した恐怖、これをかぶることを強制された教育、教師たちの暴力、差別といじめの行為を思い出す。今の人たちには尋常小学校と国民学校の区別はどうでもよいことかもしれない。私にとっては受けた傷はいまでも忘れられない。

空襲警報の叫び声と敵機の轟音が頭上に聞こえたのとはほぼ同時だったと思う。とるものもとりのあえず町内の共同防空壕に飛び込んだときは機銃掃射が間近に迫っていた。8時頃になって、私の家の筋向かいにあった旅館三洋館裏から出火したとの連絡があり、母が一番下の弟を背負い、私とすぐの弟の4人でちょうど三洋館の真向かいにあった地域防空壕から脱出した。父は足が萎えて歩くことができなかった祖母を助けるために残り、金子牧場で落ち合うことを決めた。祖母に別れをいういとまもなかった。

子どもの足で歩ける距離はしれている。逃避の途中でなんども休み、艦載機の波状攻撃をなんとかくぐり抜けた。



一度目は柳田本店前の防空壕に駆け込んだ。近くに爆弾が落ちた。二度目は根室劇場の前で遭遇し、防空壕を発見できず、側溝に伏せた。三度目は北斗小学校の前で、その筋向かいの通称「ドングリ林」の中に逃げ込んだ。どの坂道を登ったかは記憶に残っていない。ただ、駅前の道で暴れ狂う馬に遭遇したように思う。馬も人間と同じではじめての体験に恐怖し、逃げ場を失っていた。こ

の記憶が正確だとすると、根室劇場の角を折れてまっすぐ坂を登ったはずだ。

「ドングリ林」は今でも一部が中学校の敷地内に残っている。当時はもっと大きな林だった。飛び込んで驚かされたのは、そこが軍隊の基地の一部だったことだ。大量の軍需物資が積み上げられていた。いま考えると、あそこに爆弾や機銃が直撃すれば私の生命は即座に失われていたであろう。林の中に多数掘り込まれていた「たこつぼ」の一つに皆で飛びこんだ。ちりぢりになった家族の無事を神仏に祈った。



金子牧場をめざしたこの道のりを思いだし、記憶をつなぎ合わせる作業は、私と私の家族に突然襲いかかり、今に至るまで私を苛んでいる過酷な運命を思い出させ、とてもつらいことだ。

ドングリ林を脱出したのは米軍機の攻撃が止み、空襲警報が解除されてからであろう。根室空襲研究会『根室空襲』によると、報告によって時間が違うが、おおむね午後4時半から5時頃と推定される（注）。空襲警報が解除されたが、断続的に続いた空爆が終わったのは俄には信じられなかったから、完全に爆音が聞こえなくなるまでかなりの時間ここにいたと思う。

金子牧場にどのように歩いて行ったかは、まったく記憶がない。私の記憶にすり込まれているのは、牛舎の前での父と一番上の姉と再会した情景である。闇の中にランプの明かりで浮かび上がる情景である。私が先についたのか父が先についていたのか定かではない。再会でお互い無事だったことを、生きていたことを喜び合うといった情景ではなかった。父は祖母を伴ってはいなかったからだ。祖母の生死をどのように父に問うたかかは記憶していない。呆然とする父と泣きじゃくる私を思い出すだけだ。父は寝たきりの祖母の布団に防火用水から水を十分にかけてきたと説明した。私は祖母の部屋だけが焼け残っている状況を想像し、ただ祖母の生存を望んだ。

翌日、父は一人で自分の母の死を確かめ、現場で荼毘に付した。翌々日、私と家族は祖母の骨を拾いにまちに戻った。高みからまちを眺めて息をのんだ。まちの中心部はほ

どんどん焼失していた。私の家だけが焼け残っているかもしれないという願望などいっぺんに消し飛ばされた。家の焼け跡で茶毘に付された祖母の骨を拾った。焼けたトタンの上の骨はことのほか多く、近くで拾った焼けた石油缶を骨壺代わりに拾ったが入りきらず、父が原形をとどめていた頭蓋骨を手で割った。脳が炭化して残っていた。祖母は頭が大きかった。石油缶の骨壺をだいて皆で金子牧場に戻った。

金子牧場に何日か留まったあと、北斗小学校の体育用具置き場に移った。家財道具はなにもなく、体操用マットが布団になった。ドアには無数の爆弾片が切り裂いた穴があった。爆弾は地上で爆発すると無数の大型ナイフのように鋭利な弾片を周囲に飛散させて、人を殺傷する。テレビ映画で最近多く見る空襲シーンはこの弾片の飛散を正確に描写していない。先年ベトナムのホーチミン市を訪問したとき博物館に米軍の投下した爆弾と一緒に弾片が積み上げられて展示されていた。戦争の惨劇を共有していたことを思い、こみ上げてくるものがあつた。

(注) 根室空襲研究会『根室空襲』1993年9月刊、32ページ。



金子牧場が本当にあつたのか、それがどこであつたかを突き止めることが躊躇われたのは、あの日にまちの高みから眺めた状況と私の深層に潜められた感情を呼び起こすことへの怖れからであつたろう。その潜められた感情は私

の人生の節々で引き出され、増幅された。多数の第二次大戦記録映画、朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争、アフガン戦争、ガザに対する非人道的無差別爆撃等の報道や記録に接していつも深層に潜む感情を有無を言わず引き出された。阪神淡路大震災のような自然災害の体験も引き出しの契機となった。私の体験と感情はそれらの歴史的体験とただ共鳴しただけでなく、増幅されていったと思う。

戦争体験を語り継ぐことが重要なこはいうまでもない。しかし、伝えられるのは被害の事実だけであって、現実には体験した人の内部に潜められた感情は到底伝えられない。被害の事実についてさえも、体験したことのない人たちやバーチャルな殺しあいの世界に浸りきっている若者たちにはさほど深刻な数字には見えないだろう。私は、戦争の「語り部」たちのように自分に体験を流ちょうに語る器用さもない。まして家族の不幸を回避できなかったことへの後悔と非難の入り交じった複雑な感情など到底表現できないのだ。

そうはいいいながらも、私はあの体験を書きたいと思うようになった。自分のことを、いわば自分史として子孫に残しておきたい気持はさらさらない。戦争の惨禍の語り部の役割を果たしたいわけでもない。今の時代を見ると、私自身とその家族の体験など簡単に無視、抹殺される状況が作り出されている。そのことにいいようのない恐怖を感じる。自分の存在そのものが全否定されるような気になるのだ。それほどまでに戦争体験は私の生涯の中で重いことに気づきはじめている。

私たち民衆の体験を無視して国や大企業のリーダーたちの歴史として記述され、それが国の歴史として教えられる。

広島や長崎、沖縄を除けば、戦争が国内でも闘われ多くの人びとが殺されたことを示すものは何もない。

無差別に民を殺傷して戦意を削ごうとする無差別な攻撃が現代の戦争の核心であることは百も承知していながら、パキスタンでもパレスチナでも誤爆といいのがれをしながら殺傷が続けられている。戦火がこのような地方のまちに及ぶまで負け戦を続け、多くの家族を耐え難い不幸に陥れた指導者たちの無責任ぶりはが追求されることもなく今日に至っている。それどころか、その責任追求は私どもの世代を最後に忘れ去られようとしている。私はこのことに耐えられないのだ。原爆症患者にさえ補償を渋る政府が、私たちが被った損害を補償するなどあり得ないことだ。彼らはただひたすら私どもの声が小さくなり、死に絶えることを待っているのだ。



2007 年夏、旧友 I 君が金子牧場の係累の女性を探し出し、訪問の機会を設定してくれた。これまで未知の人にお会いする機会は無数にあったが、今回は秘密を解き明かせるかも知れないと心が騒いだ。私より数歳若い方で、私と学校で交差することのなかった人だった。

金子牧場はあったのでしょうか、確かにありましたよ。どの当たりだったでしょう。I 君は駅裏と推定していたが、急斜面で牧場など経営できないはずで、私はもっと遠い場所と考えていた。駅裏の斜面を降りきって沢をわたると道

は上りになり、落石の方角に右に折れる。折れずに再び上った辺りの平地がそうではないかと、私は考えていた。高校時代に何度かこの場所を体験する機会があったので、いくらかは土地勘があった。半島を南北に走る道は当時はなかった。だから金子牧場はこの沢を登り詰めた辺りと推定していた。違いますよ、もっと南ですよ。I君はすぐに合点がいったようだった。

この金子牧場は本当に私の言う金子牧場なのだろうか。戦後何年かたった頃、わが家の茶の間で金子牧場のご主人が野つばに落ちて死んでいたことについて話題になっていたことがある。冬のことだ。この辺りの吹雪は危険きわまりない。一面の銀世界のなかで方角が分からなくなり、道路も原野も沢もどこかわからなくなってしまう。まして原野に点在する野つばなど、これに落ちたら這い上がることはできず死に至る。金子牧場のご主人のある意味で不名誉な死についておそるおそる尋ねてみた。そうなんです、おじいさんは遊び好きで、まちに出かけて飲んだ帰りの事故でした。私のおぼろげな記憶が事実となった。

祖母と金子牧場の家族との間にどのような接点があったのだろうか。おじいさんの出身は新潟と聞いています。おばあさんはどこと言ったか、たしか「はくえ」とか・・・「ああ、それは羽咋のことですよ」。私の祖母と同郷であることは考えもしていなかった。酪農の人と漁業に関わる家族にどのような関係があったのか、これまで抱いていた疑問が氷解した思いであった。

私の祖母キノは、戸籍によると 1861 年（慶応元年）に石川県羽咋郡西海村字風戸（現在は志賀町に編入されている）に生まれた。父親不詳の私生児であったという。何歳

の時に北海道に移住したのかは定かではない。佐渡出身の佐々木岩蔵と所帯を持った。岩蔵とどこで知り合ったかはわからない。岩蔵はすでに所帯を持っていて子どもが数人いたが、先妻を離縁しキノと暮らし始めたようだ。岩蔵とキノの長男が 1888 年（明治 21 年）8 月に誕生していることから推定して、その前年の 1887 年（明治 20 年）には一緒に暮らしていたのではないだろうか。岩蔵は 1853 年（嘉永 6 年）生まれ、1887 年に一緒になったとすると 34 歳当時としては分別盛りの年齢であった。1 歳下の女房を離別し、26 歳の若い女と一緒にになったわけだ。いまでいう略奪婚とでもいうべきか。先妻は子ども 2 人を連れて佐渡に帰っている。おそらく祖母はおそくとも 20 歳前後には移住していたと推定する。もっと若い時だったかもしれない。また、岩蔵は 1906 年に 53 歳で死去し、祖母は魚の行商などをしながら一家を支えた。

祖母は読み書きはできず、そろばんもできなかった。このまちでは掛け売りが一般的で、場合によっては半年ごとの支払もあった。祖母はすべてを記憶していて息子や孫たちに書き出させていたという。移住した女たちは働き者だった。郷里での生活以上のものを望んで移住したのだから当然のことなのだが。金子さんの祖母も働き者だったと述懐する。

若い女たちがどうやって能登半島の寒村から北海道の東端にまで移住できたのだろうか。女手一つでどうやって生活を維持できたのだろうか。移住を支える船のルートと同郷人の扶助組織が作られていた。先に移住し安定したものが後に来るものを支える慣習があったと思う。金子さんの祖母も N 家に養女に入ったという。おそらく同郷か親戚

であっただろう。いまでも強固な組織として機能しているかどうかは知らないが、私の少年時代には同郷者の組織がこのまちに網の目のように張り巡らされていた。石川県人会、羽咋郡友会、西海郷友会と村単位にまで組織されていた。しかも能登あたりは北前船の寄港地が多く、船主、船乗りも多かった。移住は現代で考えるほど苦難の道ではなかったと想像する。冠婚葬祭の支援から頼母子講にいたるまで相互扶助が行われていた。私の祖母は移住者としては古顔であったから、移住の仲間として、あるいは移住者たちのリーダーとして金子さんのおばあさんと親交があったのだろう。

あの日の前日、7月14日夕刻に起きたことのおぼろげな記憶がよみがえり、つなぎ合わされた。金子牧場のどなたかが馬車で疎開を勧めに来た。牧場から私どもの海岸の家まではかなりの距離だったのに、その距離を馬車を走らせてきたことに感動する。この行為は同郷人としてこの気候きびしい地で支え合って生きてきたものたちにしか理解できない人情がさせたことだったのだろう。

あの時疎開をしていれば、私の家族の家族の不幸は避けられたのにといまでも思う。その申し出を断ったのは、おそらく祖母自身であっただろう。父は祖母の意思に逆らって決断できる人ではなかった。しかも、翌日に待ち受けていた悲惨な結末を誰が予想できただろうか。結局姉たちの晴れ着を入れた行李をいくつかお願いしただけだった。姉たちのものをお願いするなら、私の「宝物」もと私は親たちに懇願したが、こっぴどく叱られた。宝物と行っても、ノートや鉛筆の類だったから、親の叱責も当然だった。しかしなぜ姉たちのものだけがと言う不満はいまに至るまで残

っている。もっとも姉たちの晴れ着も戦後すぐに罹災者の足元を見て物々交換で法外な支払を迫った農家の手に渡ってしまったのだが。私の深部に潜められた親たち、特に父の優柔不断への不満は今でもくすぶっている。

そういえば、子どものころに「金子のばあさん」という呼び名をよく聞いた気がする。姉に尋ねると、わが家と親戚だったのではないかと言う。私にとっては金子のばあさんと祖母であるカクサのばあさんが親戚であったかどうかはどうでもよいことだ。金子牧場と金子のばあさんが一致し、あの日の関係を説明できる親しい仲であったことを知っただけで十分であった。



I 君の車で連れて行ってもらった。私はこの道を歩いてみたい、あの時を自分の足で追体験したいと願っていたが、ホテルの窓からでも確認できない遠方だった。地図で確認するとドングリ林から4キロに近い距離である。しかも二つの深い沢を越えての場所で、いまの私の脚力ではかなわぬ距離であった。

車を降りてみると、何もないただの原野であった。木が一本もないこの原野はもともとの自然のかたちではない。開墾され後に放置された跡なのだ。馬の力を借りながら大地に強く根を張る切株をひとつひとつ掘り起こした結果なのだ。

I 君の祖父は屯田兵としてこの地に入植したという。屯

田兵の和田村開墾地跡と接していることを発見して感慨深



げであった。もちろんその開墾地跡も当時を偲ばせるものはなにも残っていない。考えてみると、この場所は記念碑や説明板こそないが、このまちの開拓を象徴する場所ではないか。屯田兵と働きの能登衆の女性という

このまちの開拓者の集団が交差した場所ではないか。そのことをこのまちの住民も歴史家も知らない。ここは名もなき人びとの労苦の跡なのだ。ほかの人はいざ知らず、私にとっては戦争体験に留まらない重要な思索を可能にする場所であった。

金子牧場に逃れた翌日から米軍の艦砲射撃があるという噂が流れ、日中は茂みに隠れた。いま考えるとまったく意味のない行動だったが、体験したことのない恐怖と情報の不足が人を狂わせた。茂みは斜面にあり、南に面していたと記憶する。探してみると、金子邸と畜舎があったとおぼしい場所のすぐ裏の沢に面して茂みがあった。茂みが半世紀以上も同じままということはある得ない。しかしここに違いないと確信した。私の脳裏に焼き付けられている半世紀以上前の情景はベトナム戦争と同じではないか。映像で見たアメリカ軍の攻撃に逃げ惑うベトナムの農民たちの姿と重ねられる自分を思った。

短 信

老いと病に付き合って生きる

この 2 月に満 73 歳の誕生日を迎えた。これほどまでに長生きする、長生きできるとは思ってもいなかった。歳を重ねることは楽しいことにも思われるが、体力の衰弱が加速度的に進むのを自覚しながら暮らすことになる。脚力は衰え、眼も歯も以前のような力はない。現役の教師の時は同僚や学生に迷惑をかけられないから、気を張って毎日を過ごしていたが、現役を終えた今はその必要もなくなった。病院通いをしながら生きていくことが素直に受け入れられる気になりはじめている。

昨年夏、台湾旅行から帰ったその日から左肩が上がらなくなった。腱が切れているかかどうか判定をしてもらうのに 2 ヶ月以上検査のために病院をまわらされた。結論は断裂してはおらず、頸椎のどこかで神経を圧迫してのことだろうという診断に収まった。手術すれば動くようになるが、元には戻らぬと宣告された。手術を断り、週 1 回のリハビリで腕が上がるように根気よく努力することにした。これをよい機会として検査入院し、医師たちが考えられる限りの病のリストを作ってもらった。病か加齢によるものか不摂生にによるものか、そんなことを気にするのはどうでもよいことのように思われる。老いと病とうまく付き合って

生きること、それが肝心だと思うようになっている。体力を維持するためにスポーツクラブに通い、時々病院に出かける。その合間に読書と執筆というのが私の今の生活スタイルである。

最近多くの別れがあった。これから生きていくための模範と思っていた人たちの死も、昔の活動仲間の死も、私を落胆させる。生きるためのモデルが消え、自分自身で生き方を作っていかなければならない。「余生」的な生き方は私には似合わない。地球環境危機、世界平和、貧困、倫理的危機等の地球問題群が叡智によって解決されうるか、これまでだん考えてきたことがどのように推移するのか、しっかりと見極めて生きたいものだ。

男の見映え（みばえ）

夏になるといつも考えさせられることがある。この時期になると政治家たちがクールビズと称していささかバランスを欠いた、らしからぬ格好をしはじめる。政治家だけではない、メディアに登場する評論家、アナリストの面々もご同様だ。少しぐらい暑くともリーダーたるもの身なりはきちんとすべきだと思う。スーツ、白いシャツと一体の筈のネクタイを外しただけの姿はだらしないと言いがたない。クールビズというなら、それにふさわしい公的な装いを考えるべきではないのか。

最近巷では戦国武将が人気という。戦国時代の武将たちは甲冑、陣羽織、旗指物で個性を競った。敵に露出するの

を承知の上であった。女性たちの衣装も個性的であった。見映えのする個性的な装いに努力する、それが指導者たるものの心意気というものだ。少しぐらい暑くても我慢することだ。

そういう私自身、ある時期から服装をそれらしく整えることについて極端なまでにものぐさになった。研究の仕事、講義、そして会議、この三つの仕事のうち前の二つはかなりのエネルギーを必要とする。リラックスして取りかかれる服装をと願うようになった。仕事の場面を変えるたびに服装を変えるのが面倒になり、ジーンズ、ノーネクタイが普通になった。学生気分が抜けきれないとか、「マイペース」とか陰口を叩かれたが、あまり気にはかけなかった。服装と第一印象で人を評価するような場所に出かけるときだけ、ネクタイをしめ革のカバンをもった。服装や外見で人を評価する輩を密かに軽蔑したりもした。そういう輩が跋扈する場所には出たくない気持ちが日々強くなっていった。そのように私を批評した連中がいまではこのようにいい加減に装っているのだ。

70 歳を超える年齢になって、私はどう装うべきかについて思い悩んでいる。高齢化の時代に見映えがよい装いはどのようなものか、どのように装うかについてあらためて考え始めている。よいモデルはないものか。現役の頃私は極端なまでに出不精になった。公的な場所出席を求められたらどうしようと不安にもなる。僧侶をしている友人が「それならお坊さんになればよい。立派な法衣一式をお貸ししますよ。あなたは体格がよいから、格好良く見えますよ。」「資格を取らないと駄目なんでしょう。」「いや私のところは浄土真宗ですから、檀家になれば何の問題もありま

せんよ。」ふとこんな約束を思い出した。法衣を着て歩くのも悪くない。

拙宅の宝



拙宅の小さな庭に松の木が二本ある。出入りの植木屋さんは、そのうちの一本の樹齢は300年以上だと言い、御所の北でこれほど枝振りのよい木はないと褒めちぎる。最近平安女学院が買い取り、公開している旧閑院宮邸の庭木にもこれほどのものはありませんよなどと言われると、お世辞とはいいながら悪い気はしない。年に一度植木屋さんに「散髪」してもら

う。私同様不精者に見え、重い頭に耐えかねていたかのような姿が見事な枝振りに再生する。毎年繰り返される植木屋さんの職人芸は木を生き返らせる魔法にも見える。

何世代かの人びとの世話によってこの木の生命は支えられてきた。私と同じようにこの木の生气から力をもらった人は多かったに違いない。これからもそうであってほしいと願って手入れをしている。私どものあとに住む人は、古びた家屋を建て替えてもよいが、300年以上にわたって生き続けているこの木だけは伐らないで生き続けさせて欲しいと思う。古い家が庭木もろともブルトナーでなぎ倒され、街路樹やグリーンベルトの樹木が伐採されるのを目

の当たりにすると、これもはかない望みかと弱気にもなる。これほどまでに生命ある樹木を平気で伐採しなぎ倒すとは、京都というまちには地球環境保全を語る資格などない。

研究所の活動

昨年末に完成する予定だった通信4号の発行は体調不良のせいもあって遅れに遅れた。定期刊行物であるようなないようなものだから、遅れについて焦ることはないのだが。その上経済学批判の仕事は滞りっぱなしである。読んでいたはずの古典の読み直し、新しい文献の発掘等、しなければならぬことの多さにに苦闘している。集めて読み考える、しかも激動の時代に照らして考える手法は、大学研究者時代には不可能であった。それだけに、いまそれに没頭できることは大きな喜びである。グローバル資本主義批判と地球環境危機論については、実証という従来のやり方をとらずに現実の錯綜した関係を解きほぐし、核心を取り出すにはどのような手法がよいのか、思案の最中である。手探りで進んでいる遅々たる歩みにこれからもご支援よろしく。

この号にも書いた 1945 年夏の私の体験をなんとか数年以内に書き上げたい。他のことはともかく、私自身の体験と感性の問題なのだから自分で書くしかないのだ。それにしても、地方都市の戦争体験を実証する資料はほとんど残されていない。戦争体験だけでなく、現代史全般に関わる地方資料の保全はお粗末のきわみである。この時期の資料を意図的に抹殺しようという意図も働いているような気がしてならないのだが。